

令和3年度 教育事業
「防災キャンプ」

1 趣旨 仲間と共に協働体験を通して、防災スキル等を身につけながら、助け合うことの大切さに気づき、普段の生活にも生きる考え方や態度を養う。

2 日程

(1) 期 日 令和3年10月23日(土)～24日(日) 1泊2日

(2) 参加者 小学校3・4年生 21名

(3年生：男子5名、女子7名 4年生：男子5名、女子4名)

(3) 研修内容

10月23日(土)【体育館泊】	10月24日(日)
10:30 はじまりの会 ・仲間作りの活動 ・オリエンテーション	6:00 起床
12:00 昼食 食堂	8:00 朝食 食堂
13:00 活動①「防災体験」 ・地震体験車(晴天のみ)、煙道体験 消火器体験、簡易担架作り	9:00 活動④「たき火体験」 ・たき火の材料探し ・たき火に挑戦 ・たき火で簡単おやつ
16:20 活動②「段ボールベッド作り」	11:00 活動⑤「防災ご飯作り(昼食)」 ・ポリ袋炊飯、豚汁、持参した缶詰
18:00 夕食 食堂	13:00 終わりの会
19:00 入浴 浴室	13:30 解散
20:00 活動③「クリアキャンドル作り」	
21:00 就寝	

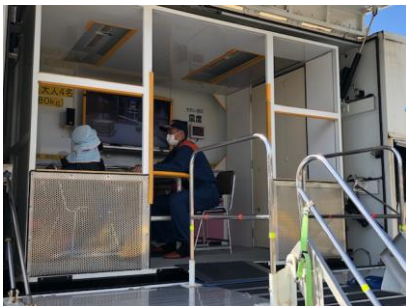
3 成果と課題

(1) 活動プログラムの実際

①防災体験

羽咋消防署に協力いただき、「地震体験車」、「煙道体験」、「消火器体験・簡易担架作り」の3つのブースを周りながら、災害の体験と災害時にとるべき行動について学んだ。「地震体験車」では、震度2～7までを体験し、実際に大地震が起こった時には、自分の身を守ることで精一杯であることを体感した。また、家具の固定や避難場所の選定などを災害に備えて日頃からしておくことの大切さについて考えることができた。「煙道体験」では、煙が充満した屋内では素早い避難行動が難しいことを体験した。有毒な煙を吸い込むことが死亡原因として多いことを知り、火事の怖さについて考えることができた。「消火器体験・簡易担架作り」では、消火器の使い方を学び、「ピン・ホース・レバー」のキーワードを覚え、水消火器を実際に使ってみた。身近にある物を使っての簡易担架作りでは、担架の作り方や負傷者の運び方について学ぶことができた。

最後には、写真を見ながら東日本大震災での活動の様子についてお話を聞いた。参加者は災害の怖さやたくさんの人が協力して救助活動が行われたことを知ることができた。



【地震体験車】



【煙道体験】



【消火器体験】

②段ボールベッド作り

災害時の避難場所で使われる段ボールベッドを参加者自身で作成して体育館に並べ、ダンボールベッドで就寝した。災害時には普段の快適な生活ができなくなることや備蓄しておい

た物や身の回りの物を使って工夫することで、少しでも快適な生活ができることを学んだ。また、避難生活では物品が不足することや、助け合ったり、譲り合ったりすることの大切さを体験から学ぶことができた。

③クリアキャンドル作り

防災アイテムとしても活用できるクリアキャンドル作りを行った。思い思いにオリジナルのキャンドルを作り、真っ暗な体育館の中でキャンドルを灯した。キャンドルの出来栄に喜びながらも、「これだけではすぐなくなるから、他にもろうそくや懐中電灯、電池も準備しておくといい。」、「真っ暗になってもすぐに使えるように置く場所を決めて置いたらいい。」といった災害時を意識した言葉が聞かれた。



【段ボールベッド作り】



【クリアキャンドル作り】



【たき火体験】



【ポリ袋炊飯・缶詰】

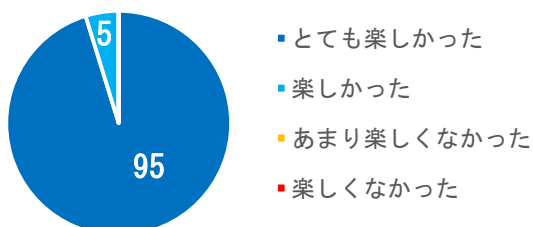
④⑤たき火体験・防災ご飯作り

たき火体験では、たき火の材料となる小枝や杉の葉を集め、ファイヤースターターとマッチを使ってたき火を行った。日常生活の中で火を扱う経験が少なく、マッチを使うことが初めての参加者も多く、火を起こすことが難しかったが繰り返しチャレンジし、すべてのグループが着火できた。たき火を使ってマシュマロを炙って食べたり、暖をとったりすることで火を使う良さについて考えることができた。

防災ご飯作りでは、ポリ袋を使った炊飯を行った。ポリ袋で炊飯できることを疑う参加者もいたが、実際にうまく炊けるととても驚いていた。この活動でも、身の回りの物を使って工夫することでできることがあることを学べた。おかずとして参加者各自が缶詰を持参した。参加者の話では、これまで家庭で缶詰を備蓄していないことや缶詰を食べた経験がない参加者が多いことが分かった。しかし、事業前に家族で缶詰を食べたり、備蓄するようになったりした参加者も多くいた。

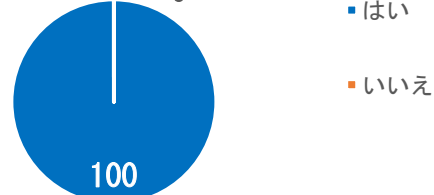
(2) アンケート結果について

防災キャンプは楽しかったですか。

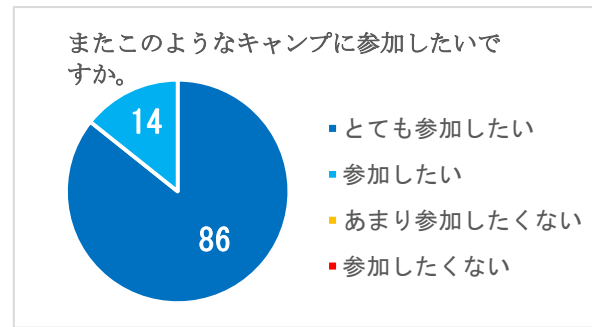
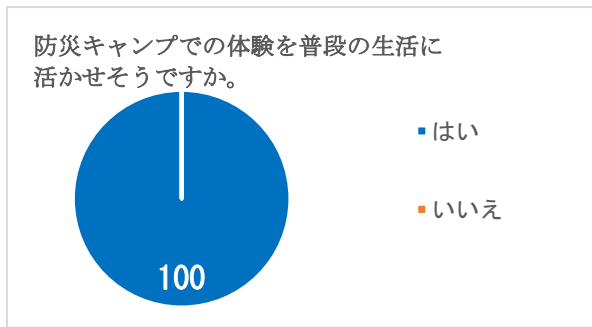


- ・たき火体験、マシュマロ焼
- ・地震体験車、煙道体験
- ・段ボールベッド
- ・防災ご飯作り

グループで助け合いながら活動ができましたか。



- ・新しくできた友達と段ボールベッドの準備を協力してできた。助け合って楽しかった。
- ・友達が困っているとき助けてあげた。うれしかった。
- ・協力すると自分も相手もいい気持ちになった。



<参加者の自由記述より（一部抜粋）>

- ・地震体験車で体験したようなことが起こったら大変だと思った。
- ・地震はいつ起きるかわからないので、備えは大切だと思いました。
- ・災害が本当に起こったときのためになった。
- ・火を付けるのが大変だと思った。
- ・避難している人はこんなことをしているんだと思いました。
- ・防災は1人じゃなく、みんなでやるものだという事。
- ・災害で避難したら、そこではみんなで助け合わなきゃならないことがわかった。
- ・前まで災害のことを甘く見ていたけど、もっとすごいものだということが分かった。
- ・段ボールベッドで寝たらつぶれると思っていたけど、板を入れるとつぶれないからびっくりした。
- ・ポリ袋でご飯を炊くと、とけると思っていたけど、とけなかったのでびっくりした。

(3) 成果と課題

①成果

- ・事業評価アンケートでは、総合的な満足度は「とても楽しかった」95%、「楽しかった」5%となっており、肯定的評価が100%となった。「助け合いながら活動ができたか」でも、「よくできた」100%であった。自由記述でも、「防災キャンプで学んだこと、身に付けたこと」、「助け合いができたこと」について、肯定的な意見が多くあった。
- ・体験を通し、災害の怖さや準備の大切さ、災害時の行動、災害後の避難についてなど災害前、災害時、災害後のそれぞれの場面で大切なスキルや態度を学ぶことができた。特に、防災は1人で行うのではなく、家族や友達、地域の人が協力することが大切であるという振り返りに対し、多くの参加者が共感していた。
- ・段ボールベッドでの宿泊体験では、実際に一晩を体育館で過ごしたことで備蓄の大切さや避難所での過ごし方についての考えが変容した。
- ・防災ご飯作りのおかずとして、参加者に缶詰の持参をお願いしたことで、缶詰を食べる経験に加え、各家庭で事前に備蓄食料について考えたり、缶詰食を経験したりすることにつながった。防災キャンプの参加者の家族にも防災について考えるきっかけとなった。

②課題

- ・今回の事業では対象を小学校3・4年生としたが、防災時には年齢を問わずに協力する必要があることから、対象学年の幅を広げることで、助け合う場や機会をより多く設定することができたと考えられる。
- ・個人で行う活動が多かった。互いに助け合う姿が見られたが、計画段階からグループで助け合うことを必要とする活動を設定することで、より助け合いことの大切さが実感できたのではないかと考えられる。
- ・たき火体験では、マッチを使う体験を多くさせたかったが、十分な活動時間をとることができなかった。スキルを身に付けるために十分な時間を設定する必要がある。